

都城市議会議長様

提出日 令和8年6月10日

視 察 報 告 書

1, 会派名及び視察者名

公明 綿屋善明 音堅良一 坂元唱子

2, 視察先・テーマ及び日時

令和8年5月12日(火曜日)～14日(木曜日)

令和8年5月13日(水曜日)

午前9時30分～12時00分 島根県 県 庁 「島根県の畜産業の概要」について
午後2時00分～ 4時00分 島根県 雲南市 「木次堆肥センター」について
午後4時30分～ 5時30分 島根県 雲南市 「熟豊ファーム TMR センター」について

令和8年5月14日(木曜日)

午前9時00分～11時30分 島根県 雲南市 「熟豊ファーム第一農場」について
午後1時00分～ 2時30分 島根県 雲南市 「熟豊ファーム本社」について

3, 視察の内容

① 島根県 県庁内 農林水産部 「島根県の畜産業の概要」について

- ・ 輸出を中心としたしまね和牛の販路確保に向けた取組について
- ・ 耕畜連携によるたい肥の利活用について

② 島根県 雲南市 「木次堆肥センターの現状」について

- ・ たい肥の製造工程について
- ・ たい肥の販路確保について

③ 島根県 雲南市 「熟豊ファームの取り組みと TMR センターの概要」について

- ・ 廃用牛の再肥育を通じた持続可能な畜産の在り方について
- ・ 官民連携による畜産物の販路拡大について

面談者

島根県農林水産部 参事(畜産課長事務取扱)

島根県議会事務局 政務調査課 主幹

(株)モア・フレッシュ 専務取締役

(株)塾豊ファーム 代表取締役社長

(株)塾豊ファーム 代表取締役

(株)塾豊ファーム 専務取締役

(株)塾豊ファーム 取締役総務部長

加地紀之様

光ツ國大輔様

三島隆二様

石飛 修平様

石飛 凜太郎様

竹内一馬様

山本万里絵様

4, 視察の感想

綿屋善明

① 島根県農林水産部「島根県の畜産業の概要」について

島根県庁を訪問し、同部の加地参事より同県の農業について「島根県農林水産基本計画」をもとに様々伺いました。この「基本計画」の冒頭、これまでの県の取組で失敗したものを真摯に振り返り、その現状を分析し課題を洗いだした上で、新たな県内農業の進め方を導き出していることに驚きを禁じ得ませんでした。行政が、自らの非を認めることが、どれほど勇気あることか、と思うからです。「島根で牛を飼う魅力づくり」に失敗していた、先進的な技術やノウハウを一般農家の経営改善に活用できなかった、集落ぐるみで畜産経営(水田放牧)を推進してきたが、「農地や水田の維持管理が主目的」という発想から脱却できず、生産振興の面では期待された成果が得られていない。こうした文言から、なんとしても農業振興を図りたいとの強い意志を感じます。海沿いまで山が迫ってきている地形のため、耕地面積自体、元々限られている中、県として、どのように農業振興をはかれば良いか、呻吟されている様子が伺えました。

日本一、小規模農家の占める割合が多く、1,000 頭以上の牛を養う農家は 6 件。本県の 10 分の1の畜産規模。その背景にあるのは、先の地形と共に、たたら製鉄とともに益牛として畜産が発展した背景から、大規模飼育に至っていません。たどってきた道のりは、本市と異なるものではありませんが、家族経営を含む小規模経営体では、経営そのものの存続が限界にきているという点で、大変参考になりました。

② 島根県雲南市の指定管事業者 株式会社モア・フレッシュ

「木次堆肥センターの現状」について

島根県全体では、合計 79 箇所(令和8年6月現在)のたい肥センターがあります。そのほとんどが、個人か法人が設立したものです。その中で、私達が会派視察した、木次たい肥センターは、指定管理事業者に管理運営を委託しているものの行政が設立した施設になります。

指定管理事業者の三島隆二専務取締役によれば、たい肥の需要はある、とのことでした。販売価格は、1t=1千円。買取りに来られる業者は、4tで来られ、近くの水田で利用される、とのことでした。比較的安価なたい肥の購入は、農家にとってとても心強いものと感じました。また、家畜排せつ物の処分価格は、1t=2万5千円とのこと。本市で200頭前後の和牛を肥育する農家から、処分してくれるのであれば、年間300万円お金を出しても構わない、とのお声を伺っています。畜産農家にとって、大きな課題である排せつ物の処分を適正な価格で行う仕組みの創設が、本市の農業にとって大きなメリットになるものと考えます。

一方で、たい肥施設の設立にあたっては、周辺住民の理解を得ることが大変難しいとのお話を伺いました。家畜排せつ物処理をしなければ廃業も考えなければいけない農家と、穏やかな住環境を保ちたい住民とのバランスをどうするか、設立場所に配慮

しなければいけないことを学びました。また、たい肥センターの運営は、全国的に赤字覚悟で臨まなければならない、ということも再認識することができました。

③ 島根県雲南市「熟豊ファームの取り組みと TMR センターの概要」について

以前から、「TMR」という言葉を聞いてはいましたが、そこで何を目的に、どのような作業が行われているのか知る機会がなかったため、大きな学びとなりました。

熟豊ファームは、「環境への配慮・資源の再活用・命の尊重といった新しい倫理を加えた、未来につながる新しい和牛」をコンセプトに和牛生産を行っています。そのため、TMRセンターにおいても、豆腐や醤油の製造過程で出る粕、規格外のさつまいも、そば、デントコーンなど、廃棄されるはずの栄養価の高いものを地元で調達し、有効に活用していました。一頭の和牛の後ろに、雲南市の食品業者や農家など、多くの顔を見る思いでした。

いま、たんぱく源である大豆やトウモロコシの価格が上昇している中で、熟豊ファームでは、デントコーンを栽培しこれに充てています。デントコーンは、大変生命力が旺盛で、半分切って放っておくと、そこから茎をのばして、もう一度収穫することができるすぐれものである、と教えて頂きました。

熟豊ファーム TMR センターの視察を通して、和牛農家の収入を増やすためには、安価な飼料の確保やそれを応援する地域の取組が必要であると感じました。食は、人の生きる源であるからこそ、地域で様々な方々が連携・協力することで、農業振興を図っていくことが重要であると感じました。

4, 視察の感想

音堅良一

① 島根県農林水産部「島根県の畜産業の概要」について

島根県の畜産は、農業産出額の38%を占め年々増加している傾向で、酪農及び肉用牛は農業産出額の26%を占める重要な産業であり、飼養者の高齢化や後継者不足により飼養戸数の減少が進行している現状がある。

肉用牛生産は安定した所得の確保が期待でき、県全域で生産拡大を推進できる品目だが、子牛価格や枝肉成績が全国平均を下回る状況が長年続いたことから、繁殖農家や肥育農家にとって厳しい環境となり、新たな担い手が「島根で牛を飼いたい」とのインセンティブが働かなかったようです。

企業経営についても、大規模経営体等にも関わらず、県の施策推進の中で、十分な連携が図れず、改良や飼料給与の先進的な技術やノウハウを一般農家の経営改善に活用できなかった。

今後の重点推進事項として、県内で発生する家畜ふんの堆肥を有効に利用して水田園芸や有機農業、稲作に取り組み、水田を活用して飼料作物を生産し、家畜に給与する耕畜連携を重要としている。また、規模の大きい耕種農家と畜産農家が中心となり、堆肥と飼料を相互に取引する取り組みを拡大支援し、耕畜連携により生産された農畜産物を、SDGs 産品として付加価値をつけて販売する取り組みを推進することで、平常時にも収益性が確保され、持続できる耕畜連携の取り組みを拡大することが重要だと考えています。

肉用牛生産の構造転換としては、「就農希望者があれば支援する」という受け身的取り組みから、「積極的に就農希望者を掘り起こす方向へ」シフトし、将来的な子牛市場価格の変動に耐えられる特色のある子牛生産を進めることで、安定した経営を目指す将来の担い手に絞って集中的に支援していく取り組みとなります。

以上の様に県は、過去の進め方を十分反省された中で、基本的な考え方と目指す姿を分かりやすく示されていますので、今後の畜産振興に大きく期待できるのではないかと思います。

② 島根県雲南市の指定管理事業者 株式会社モア・フレッシュ

「木次堆肥センターの現状」について

雲南市木次堆肥センターは市営として、平成18年に畜産農家の支援と資源循環型社会の形成を目的に作られた屋内4レーンの約7,000万円から8,000万円の堆肥生産施設であり、雲南市の汚泥や下水汚泥も取り扱い、指定管理は堆肥の専門知識のある(株)モア・フレッシュが行っています。

土壌の物理性改善や保水力向上(団粒化の促進)に優れた牛糞堆肥は、水分量70%に対し、伐採木を水分調整剤として利用しており、土づくりに欠かせない有機物を畑に投入することで、野菜や作物の生育に適した土壌環境を整えています。

現在、年間 1,200 トンから 1,400 トンの堆肥を作っており、秋の出荷時期に合わせて、もう一つの屋内施設で熟成を待っています。

堆肥生産供給者一覧には、約 50 の事業者が登録されており、牛糞堆肥バラ 1 トン 4,000 円。袋詰めは相談対応。配達・散布可能で、1 トン 10,000 円。(遠方は別途手数料)となっています。

重機は、約 20 年前にオーストリア製を約 5,000 万円で、「島根大原地区公社営産業基地建設事業」として購入しています。

③ 島根県雲南市「熟豊ファームの取り組みと TMR センターの概要」について

(株)熟豊ファームは、2025 年 11 月、ロンドンで開催された「ワールドステーキチャレンジ」で、世界約 400 社参加の中、金賞とアジア部門最優秀ステーキ賞に選ばれました。

熟豊ファームが出品したのは、霜降りを競う若齢牛ではない繁殖を終えた経産牛を再肥育した「サステナブル和牛 熟」であり、経産牛は硬いという和牛業界で長く前提とされた常識が、全情報を一切排したブランド審査の世界舞台で、大きく覆す結果だったようです。

欧州市場で重視されるアニマルウェルフェアや環境配慮を踏まえ、島根県の「^{おい}美味しまね認証」を土台に、県も関与しながらサステナブルな取り組みを可視化し、生産者、行政、流通が連動し、「どういう牛なのか」を説明できる形に整理し、実際の取引に繋がったとのこと。

同ファームは、経産牛の他に、佐賀県や宮崎県には少ないとされる交雑牛と、島根県では珍しいジャージー牛も肥育しています。

(株)熟豊ファーム TMR センターは、2026 年春に竣工し、JA グループ、地域の食品企業、農業生産者、行政と連動して構築した一体型の循環型飼料製造拠点であり、牛に必要な飼料を均一混ぜ合わせる TMR(完全混合飼料)の製造によって、牛の給食センター的な役割を果たしており、安定した同一の飼料を沢山供給するシステムが構築されています。

原料には、牧草やとうもろこし、麦の他に、地元の食品企業や農業と連携した、豆腐かす、醤油かす、酒かす、ビールかす、出雲そば、サツマイモ等を再利用することで、資源循環となり、食品ロス削減、CO2 排出削減にも貢献し、更に輸入飼料の高騰にも対応している飼料となっています。

このシステムの機械代は、約 1 億 2,000 万円と高価ではありますが、同センターの飼料で育った経産牛は、赤身の旨味が特徴な「サステナブル和牛 熟」としてブランド化され、農林水産省の「みえるらべる」制度の牛肉部門で、日本初となる最高評価「星 3 つ」を取得おり、費用対効果として十分反映しているものと感じました。

4, 視察の感想

坂元唱子

① 島根県農林水産部「島根県の畜産業の概要」について

島根県庁では、肉用牛振興に対する県の考え方や、これまでの取組、今後の方向性について説明を受けました。その中で特に印象に残ったのは、担当課長が語られた「まず、これまで進めてきた政策が失敗していたと真摯に反省すること。そこからしか、新しい一歩は踏み出せなかった」という言葉でした。行政の立場で、これまでの政策を自ら見つめ直し、反省から出発するという姿勢は大変重みがあり、目から鱗が落ちる思いでした。

島根県では、これまでのやり方に固執するのではなく、「オールしまね」で肉用牛振興に取り組む機運を官民一体で醸成し直し、考え方を大きく転換してきたとのことでした。また、「こんなことをやってみたいから力を貸してほしい」と意欲を持って挑戦する生産者に対しては、行政が全力で伴走し応援する。そのような生産者が突き抜けることで、結果として地域全体の底上げにつながるという考え方にも深く感銘を受け、行政と民間が協力し合っていること、官民連携の仕組みは大変に参考になりました。

② 島根県雲南市の指定管理事業者 株式会社モア・フレッシュ

「木次堆肥センターの現状」について

木次堆肥センターでは、家畜排せつ物を地域の負担としてではなく、地域資源として活用する仕組みを学ぶことができました。畜産農家にとって、糞尿処理や堆肥の繰り返し作業は大きな負担であり、規模拡大や飼養管理にかかる時間を圧迫する要因となっています。木次堆肥センターの取組は、こうした個々の農家だけでは解決が難しい課題に対し、地域全体で支える仕組みとして大変参考になりました。

現在、年間 1,200 トン～1,400 トンの堆肥を作っており、ストックできる堆肥舎も備えてありました。堆肥生産供給者は約 50 の事業者登録があるとの事でした。牛糞堆肥バラ 1 トンは 4,000 円、配達・散布も行っており、1 トン 10,000 円となっています。袋詰めは相談対応だそうです。

③ 島根県雲南市「熟豊ファームの取り組みと TMR センターの概要」について

熟豊ファームでは、環境に配慮した畜産経営を単なる環境対策としてではなく、ブランド価値の向上につなげている点が大変印象的でした。同ファームは経産牛を活用した日本初の SDGs 畜産ブランド「サステナブル和牛・熟 JUKU」を展開し、環境価値そのものを付加価値として国内外へ発信し、地元で発生する豆腐粕やそば粕などの未利用資源を飼料として活用するとともに、牛のげっぷ由来のメタンガス削減効果が期待されるカシューナッツ殻液を取り入れるなど、脱炭素に向けた具体的な取組を実践されていました。その結果、牛肉部門では日本初となる国の「みえるらべる」最高評

価である三ツ星を獲得し、大都市圏の百貨店等において高い付加価値を持つ商品として販売されており、注目されています。

環境への配慮は負担やコストではなく、新たな市場を切り拓くための競争力であり、ブランド戦略そのものであることを強く実感しました。また、世界でも環境基準が厳しいとされる EU 市場への輸出を実現していることから、これからの時代は品質だけでなく、「どこで生産され、どのような環境で育ち、何を食べて育ったのか」といったトレーサビリティや環境負荷低減への取組が重要な評価基準になっていることを改めて認識しました。さらに、視察した TMR センターでは、飼料の安定供給や品質の均一化だけでなく、地域資源の活用や環境負荷低減にもつながる取組を学ぶことができました。TMR センターは単に飼料を供給する施設ではなく、農家の労働負担軽減や経営安定化を支える重要な仕組みであり、持続可能な畜産経営を支える拠点であると実感しました。特に、輸入飼料価格が高騰する中で、地域の未利用資源を活用しながら飼料自給率の向上やコスト削減につなげる考え方は大変参考になりました。また、飼料調製作業の共同化・外部化によって農家が飼養管理に集中できる環境づくりは、労働力不足や高齢化が進む畜産現場において重要な視点であると感じました。

5, 視察の成果及び市政への反映等

綿屋善明

① 島根県農林水産部「島根県の畜産業の概要」について

加地紀之参事が言われた次の一言の中に、島根県の本気度をうかがい知ることができます。「農家から『県がやってくれなかった』と言われる事をさけるため、県は背中を押す役割、またつなぎ役に徹する」。「今、インフレの時代。守っていては価値が下がる。攻めのアイデアのある人しか生き残れない」。

これまで行政は、農業振興策に補助金を多用しすぎてきた感が否めません。もちろん、就農者にとって、機械導入や畜舎建設、家畜の購入費用だけで、大きな借金を負うリスクを抱える方にとって、補助金は不可欠です。しかし、「もうかる農業」を考える時、行政は補助金だけでなく、「もうからないリスク」を回避する、または減らす農業経営の環境作りのため、より力を注ぐべきであると考えます。島根県では、そのために「耕畜連携」に注目しています。農家経営における最大の課題は、糞の処理にあります。同県では、これを優良な堆肥に変え、水田の土壌改良と有機農業の促進に役立てています。

とりわけ、奥出雲で取れる仁多米は、この地域で出たたい肥のみを使っています。この、昔ながらの循環型農業が評価され、日本農業遺産の認定を受けていますし、食味についても「米・食味分析鑑定コンクール」で、何度も金賞以上を獲得する結果を出しています。「もうかる農業」を追求する上で、伝統的な米生産の農法、地域の水資源の豊かさ、地域で取れた飼料を使って育った家畜糞から作られたたい肥のように、地域の風景がイメージできるストーリー性と耕畜連携を念頭に置いた循環型農業の促進は、農産品のブランド価値向上に欠かせないものと考えます。「もうからないリスク」を地域の連携で低減し、かつ、地域資源を活用したブランド価値の向上によって増収を図る。また、経営改革を行おうと考える農家に重点的に支援を行っていく。こうした視点に立った農業政策に舵を切れるかどうか、本市において極めて重要になっていく、と考えます。

② 島根県雲南市「木次堆肥センターの現状」について

本市において、家畜排せつ物をたい肥化する施設は、間違いなく必要です。それを、官主導で行うと、市の財政を確実に圧迫するということが、島根視察及びその後、関係者への聞き取りではっきりと分かりました。その原因は、たい肥になった製品の受取先が限定されてしまうからです。事実、木次たい肥センターでつくられた堆肥は、直接トラックで運搬できる範囲の農家にしか渡らない。地域の農家を相手にするため、大きな量の需要はない。また、安価な金額でしか販売できない。そのため、機械の維持費、人件費等で、どうしても収支のバランスが取りづらいという現状が見え隠れします。

こうしたことから、たくさんの量を安定的にたい肥として供給できるノウハウを持つ民間の事業者が家畜排せつ物処理に関わるのが重要であると思います。または、地域の畜産業者が、こだわりのたい肥をつくるためタッグを組み製品化し販売する。そうした取組をする事業者の後押しをする施策の検討が必要であると考えます。

③ 島根県雲南市「熟豊ファームの取り組みと TMR センターの概要」について

熟豊ファームの取組で注目すべきは、経産牛に注目し、それを「サステナブル牛」として、自社で研究・配合した飼料を使って、豊かな味わいのあるブランド牛に上げた点であります。当初、経産牛は、比較的安価で購入されていたものの、今や、大きな商品価値を秘めた存在にまで押し上げられている。いち早く経産牛に着目した卓見は、他が真似することのできないものがあります。一連の事業の根っこにあるものは、ご家族の病を機に転職を決意し、必死に活路を見出した石飛社長の退路を断った生き方そのものです。まだ 30 代の社長が、本市の農業者に与える影響は大きいと感じます。これから就農したい、と考える皆様が、石飛社長に会い、大きな気づきを得ることができれば、と思います。

今回の島根県視察を振り返って感じたことは、本市の課題である担い手の減少を食い止めるためには、魅力的な収入と決まった休日の確保が重要であると感じました。また、畜産農家が待望されるたい肥センターについては、市が設ける、のではなく、農家がチームを組んで設けることが現実的である。そうした、自ら課題解決に向け奔走する農家を支援することは、本市が地域活性化事業において地域の課題解決のために支援する施策を組んでいることから考えても理に適っていると考えます。

熟豊ファーム及び TMR センターを視察して、チーム雲南、チーム島根を感じました。地元で豆腐や醤油を製造する業者から、その粕を頂く。また、地元の農家にレントコーンを製造してもらい、安定的にたんぱく源を供給してもらう。そして、家畜が出した糞を堆肥を使って、全国トップクラスである仁多米を生産する。こうした、地域で出たものを有効活用する循環型社会の取組をいち農業法人が積極的に関わり取り組んでいる。利益重視から、社会課題の解決に正面から取り組む法人の支援こそ、本市が目指す、「市民が主役となり行政と協力しながら、多様化する社会課題に対応し、自分たちの願いがかなう理想のまちをつくり上げていく」とする基本構想にも共鳴するものと考えます。まずは、私自身この視点に基づいた政策・施策を提案できるよう努めて参ります。

5, 視察の成果及び市政への反映等

音堅良一

① 島根県農林水産部「島根県の畜産業の概要」について

畜産課長は、「本県の畜産の発展のために」、これまでの進め方の課題を大きく見直し、大反省のもと、「島根で牛を飼う魅力づくりに欠けていた」、「先進的な技術やノウハウが一般農家の経営改善に活用できていない」、「経営支援はするが農家支援はしない」、「農家ではなく事業者と呼んでいる」などと、今後の進め方のポイントを大きく変更されました。

農家の育成を主眼に、小規模兼業農家の協力のもと、30頭以上の繁殖主業経営を育成して生産構造を転換し、安定した経営を目指す将来の担い手に絞って集中的に支援して、子牛生産の生産基盤の確立を目指すものです。また、「日本人の牛肉の好みについて」も言及され、2023年実施の「しまね和牛メニューフェア」でのアンケート結果から、一番好まれる牛肉は、サシ中心の評価から、オレイン酸含量など美味しさ指標による評価へシフトしていることや、赤身と霜降りのバランス(小サシ)が、味や食感に影響することに着目して、島根県では県独自で新たな美味しさ評価指標を確立し、プレミアムブランドを立ち上げることになりました。

以上のことから、「安定した経営を目指す将来の担い手に絞った集中的支援」の考え方や「日本人の時代の好みに合った新たな肉質のブランドの立ち上げ」は、本市にとっても同様、先を見た重要な施策であると思います。

② 島根県雲南市「木次堆肥センターの現状」について

当時、木次堆肥センターを計画された雲南市職員OBの方とも面談する機会がありましたが、畜産王国である都城市に市営の堆肥センターが無いことにびっくりされていました。生産者である畜産農家を守ることや地域環境を守るためには、施設費や維持費の収支だけの考え方だけでは成り立たないことや、まだまだ堆肥を改善して需要を増やす取り組みが重要であることも感じました。

例えば、都城市の堆肥の需要については、耕畜連携を中心に、都城の堆肥を使った農作物を作り、ブランドとして農作物を販売していくことも必要ですし、何よりも、牛の糞尿の問題を本市の課題と考え、本市の牛の堆肥を建設業、造園業、道路公園課、教育委員会、自治公民館の協力のもと、本市内で消費していく活動が重要であることも感じました。

③ 島根県雲南市「熟豊ファームの取り組みとTMRセンターの概要」について

(株)熟豊ファームの社長様は、経産牛の価値を早い時期から見いだされ、肥育のほとんどが経産牛です。繁殖を終えた経産牛を再肥育して「サステナブル和牛 熟」とウブランドを立ち上げ、和牛業界で長く前提とされた「経産牛は硬い」という常識を覆されましたが、こうした努力も飼料などを含めて簡単ではなかったとお聞きしまし

た。都城市内でもそうした先進的な考えをもった肥育農家もたくさんおられますが、最近では、子牛の価格が高騰になり、宮崎県としても経産牛への移行を進められているとお聞きしました。

島根県では、市場変化に向き合うための「日本人の牛肉の好み」についても、和牛の価値軸が見直される中、生産現場では市場変化に合わせて動き始めていますので、本市でも早急に、新たなブランドの取り組みが重要になると思います。

日本の家畜用飼料については、国際紛争による穀物・エネルギー価格の高騰によって価格が跳ね上がっていますが、その大半(約8割を濃厚飼料)はアメリカや南米などの輸入に頼っているからです。打開策としては、国産・地域内飼料へ転換することが重要であり、よって依存度が減少しますが、こうした TMR(完全混合飼料)の製造の施設を増やしていくことも解決策になるのではないかと思います。同 TMR センターも、国産・地域内飼料へ転換されていく状況であり、地元の食品企業や農業と連携した、豆腐かす、醤油かす、酒かす、ビールかす、出雲そば、サツマイモ等を再利用されていますので、素晴らしい取り組みだと思います。

肉質の良い牛を安定して育てるためにも、栄養バランスの優れた TMR(完全混合飼料)を使うことが大事で、何よりも、誰が与えても同じ栄養バランスで供給できることが利点であり、何よりも農家の負担も軽減されますので、本市でも、こうした取り組みを広げていくべきだと思います。

5. 視察の成果及び市政への反映等

坂元唱子

① 島根県農林水産部「島根県の畜産業の概要」について

今回の視察を通じて、畜産振興において重要なのは、単に施設整備や補助制度を検討することだけではなく、行政自身がこれまでの施策を検証し、現場の声を真正面から受け止め、必要であれば政策の方向性を大きく転換する覚悟であると学びました。本市は、畜産によって地域経済や市財政が支えられている一方で、農家の現場では、飼料高騰、資材高騰、人手不足、堆肥処理の負担などが重くのしかかっています。こうした課題に対し、従来の延長線上の支援だけでは限界があると考えます。今後、本市においても、畜産農家、耕種農家、JA、県、民間事業者など関係者が一体となり、「持続可能な畜産王国都城」を実現するための総合的な戦略を進めていく必要があります。特に、家畜排せつ物を単なる処理の対象ではなく、地域資源として活かし、堆肥化、耕畜連携、出口戦略、脱炭素、環境に配慮した農畜産物のブランド化につなげていく視点が重要だと思います。

本市は、農業産出額全国第1位という輝かしい実績がある一方で、離農、担い手不足、家畜排せつ物処理、堆肥の出口不足など、現場には多くの課題があります。島根県庁で学んだ「これまでの政策を見つめ直す勇気」と「意欲ある農家に行政が伴走する姿勢」は、本市にとっても大変重要な視点であると感じました。

② 島根県雲南市「木次堆肥センターの現状」について

木次堆肥センターが整備された当時、中心となって事業を推進された雲南市の元職員の方から直接お話を伺うことができました。元職員の方は、「利益を上げることも大切だが、それ以上に農畜産業を守ること、地域環境を守ることが行政の役割である」と話されていたことが大変印象的でした。また、本市が全国有数の畜産産地でありながら堆肥センターを整備していないことについて、「畜産王国でありながら堆肥センターがないことは信じられない」と驚かれ、その言葉は、改めて本市の現状と課題を考えるきっかけにもなりました。

本市においても、畜産農家からは以前より「堆肥センターを整備してほしい」「堆肥の出口を見つけてほしい」といった切実な声が寄せられています。家畜排せつ物の処理は畜産経営を続ける上で避けて通れない課題であり、処理や運搬、散布に多くの時間と労力を要している現状があります。特に中小規模の農家にとっては大きな負担となっており、経営継続にも影響を及ぼしかねない課題です。今回の視察を通じて、家畜排せつ物の処理は農家個人の努力だけに委ねるのではなく、地域全体で支える農業インフラとして捉える必要があると改めて感じました。

堆肥は適切に処理されれば貴重な地域資源となる一方で、処理や流通の仕組みが整わなければ農家の負担となり、環境問題にもつながる可能性があります。本市では、堆肥センター整備について採算性や用地確保、防疫上の課題などから実現に至っていませんが、だからこそ施設整備の可否だけで議論を終わらせるのではなく、既存施設や民間事

者、JA、耕種農家、畜産農家などを有機的につなぐ仕組みづくりが重要だと思います。また、今後の人口減少や担い手不足を見据えれば、家畜排せつ物処理を個々の農家の負担に委ね続けることには限界があります。持続可能な畜産王国都城を将来にわたり維持していくためには、回収・運搬・散布までを含めた広域的な仕組みづくりや、耕畜連携マッチングの強化、堆肥の需要拡大、地域内循環の促進などを総合的に進めていく必要があると思います。今後は、堆肥センター整備の可能性について引き続き研究するとともに、コンソーシアム方式や官民連携、公設民営など様々な手法も含め、本市の実情に合った持続可能な堆肥処理・流通体制の構築に向けた検討を進める必要があると考えます。さらに、家畜排せつ物を地域資源として活用し、環境保全と農家所得向上の両立を図る地域循環型農業の実現に向けて取り組んでいくことが重要だと思います。

③ 島根県雲南市「熟豊ファームの取り組みと TMR センターの概要」について

今回の視察を通じて、持続可能な畜産の実現には、家畜排せつ物処理、飼料対策、耕畜連携、脱炭素、ブランド化を個別に進めるのではなく、地域全体の循環システムとして一体的に取り組むことが重要であると感じました。本市は全国有数の畜産産地として、高品質な牛肉、豚肉、鶏肉を生産しています。しかし今後も国内外から選ばれ続ける産地となるためには、「品質の良さ」に加え、「環境に配慮した持続可能な産地」であることを見える形で示していくことが求められると思います。そのためには、家畜排せつ物の適正処理や良質な堆肥づくり、耕畜連携、地域資源を活用した飼料生産、脱炭素への取組を一体的に進めるとともに、国が推進する「みえるらべる」や「J」クレジット制度などを活用し、環境価値を農家所得の向上や地域ブランド力の強化につなげていく必要があると考えます。また、熟豊ファームの取組から、環境への配慮は単なるコストではなく、新たな付加価値を生み出し、販売力やブランド力を高める経営戦略であることも学びました。本市においても、環境に配慮した農畜産物のブランド化や情報発信の強化について調査研究を進める必要があると思います。さらに、TMR センターは飼料高騰対策や労働力不足対策、経営安定化を支える重要な地域インフラであり、地域で発生する未利用資源を活用することで、資源循環や温室効果ガス削減にも寄与する可能性を有しています。本市においても、TMR センターの活用や耕畜連携の強化を通じて、地域循環型農業の推進を図ることが重要であると考えます。また、家畜排せつ物を単なる処理対象ではなく地域資源として位置付け、堆肥として農地へ還元し、その農地で生産された作物を飼料として再活用するなど、地域内で資源が循環する仕組みづくりを進める必要があります。

今回の視察を通じて、畜産王国都城を次の 10 年、20 年先へ持続可能な形で引き継ぐためには、農家の努力だけに依存するのではなく、行政が一步踏み込み、関係機関や民間事業者と連携しながら伴走型の支援体制を構築していくことが重要であると改めて感じました。今後は、環境に配慮した農畜産物のブランド化、農家所得向上につながる仕組みづくり、さらには、「みえるらべる」や「J」クレジット制度の活用可能性について調査研究を進め、本市

の強みである畜産業を持続可能な形で発展させるための取組をしていくべきだと感じました。